

聖書における遊びについての基礎研究

東 義 也

A Fundamental Study of Play in The Bible

Yoshiya HIGASHI

abstracts

Play is clearly important in early childhood care and education. What does the Bible (the world's best seller) say about play? This article investigates and considers how the word פִּנְיָ "play" is used in the Bible. The word פִּנְיָ "play" was discovered 35 times in the Old Testament. Most depicted foolish acts by adults. Only one passage Zechariah 8:5 refers to child's play. It is a depiction of Israel at peace again after they had been liberated from Babylonian captivity. It is highly significant that the Bible compares children's play with adults' disturbingly corrupted life styles. Perhaps children's play is used as a symbol of peace. Furthermore there is faith in God and worship of God underlying the play. Conversely whenever פִּנְיָ "sahaq" is used in a context lacking the fear of God and lacking worship of God, the negative side of פִּנְיָ "sahaq" is seen, i.e. derisive laughter, enjoying looking at a naked body, making a game of killing each other(war). In conclusion, those of us involved in child care should keep this in mind: We should pursue and grasp the true Biblical meaning of children's play and help them enjoy and be satisfied with their own spontaneous play.

1. 問題の所在

聖書は英語でthe Bibleと書く。これはギリシア語のβιβλοςを語源にしている。βιβλοςとは巻物、文書、書物という意味であるから、聖書は本のなかの本 (the book of books) ということになる。世界のベストセラーでもある聖書はまた、プロテスタントのキリスト教会にとっては、信仰と生活の唯一の規範とされている。あらゆる事柄についての問答集ではないが、人類の持つ疑問に対して、今も多くの示唆を与えている書物である。

では、この聖書は、子どもの「遊び」というものをどのように捉えているのだろうか。これは、私が保育を志してから今まで持ち続けてきた大きな関心事であった。保育における遊びの重要性については、日本では幼稚園教育要領や保育所保育指針に明示され、現場にも浸透してきている。しかし、この遊びというキーワードについて、実に聖書はどのように言及し、また、教えているのだろうか。この問題に少しでも答えを出していこうというのが、本稿の目的である。

今回は、聖書の中で「遊び」という語句がどのように使われているのかを拾い上げることから始めたい。そして、聖書における遊びについての一考察を加えてみたい。ただ、聖書に書いていないことは重要ではないという立場を、私はとらない。聖書に遊びについての言及があまりなかったとしても、保育における遊びの重要性を否定するものではないということである。

聖書にはあくまでもその趣旨がある。¹⁾ 人間の側で一方的に抱く疑問に答えを与えるような問答集ではないのである。

2. 聖書における“遊び” שִׂחָק, sahaq の意味

(1) שִׂחָק, sahaq の訳

『旧約新約聖書大事典』(教文館)によると、遊びとは「娯楽、暇つぶしのために行われるゲームや競技、演技。時には物事を決着するために行われることもある。→音楽、競技、祭」とある。そして、ヘブライ語で שִׂחָק, sahaq 「楽しく戯れる」、ギリシア語で παιζω, paizo 「子供のように遊ぶ」という語をこれに当てている。²⁾ とところが、通称BDBで知られる A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament³⁾ で שִׂחָק, sahaq を引くと、まず動詞の laugh という意味が紹介され、続いて sport, jest, play となっている。一つの言葉にも、様々な意味が含まれているのである。また、laugh 一つとっても、喜びの声をあげて笑うとか、微笑むという意味もあれば、陰で笑うとか嘲笑するといった他者をばかにして笑うという全く正反対の意味もある。さらに、翻訳するとき sahaq にどの訳をあてるかは、訳者に任されているのであるが、訳され方によっては読者の解釈は微妙に異なってくるだろう。例えば、サムエル記下6章5節にある מִשְׂחָקֵינוּ, メサはキームの部分の新共同訳聖書では「奏でた」と翻訳しているのに対して、新改訳聖書では「喜び踊った」となっており、他にも様々な意味合いの言葉を付け加えている。単純に考えれば、どちらかの訳が正しくないということになるかもしれない。しかし、逆に一つひとつの言葉の意味深さに我々は教えられているのだと理解するのは、決して間違いではないだろう。

(2) שִׂחָק, sahaq の出所と数

sahaq の訳の多様性をさらに見ていくために、以下ヘブライ語聖書⁴⁾ に出てくるすべての שִׂחָק, sahaq を取り出してみよう。(表1, 2) そして、それらに対応する日本語訳による違いを比較して見よう。(表3)⁵⁾

Ps. 104:26 11Sh. 6:21 Prov. 26:19 1Ch. 15:29 Prov. 8:30 Prov. 8:31 11Sh. 6:5 Jer. 15:17 Jer. 30:19 Jer. 31:3 Zech. 8:5 1Ch. 15:8 11Sh. 18:7 Job 40:29 Jud. 16:25 Job 40:20 11Sh. 2:14 1Ch. 30:10	18 לִשְׂחָק 19 וְשִׂחָקָי לִפְנֵי יְיָ 20 בְּמִשְׂחָקֵינוּ... וְהִאֲמַר ה' אֱלֹהֵינוּ מִשְׂחָק אֱמַן 21 וְנִתְרָא אֶת-תִּפְקֵי דְיָדֵי כִּרְכָד וּמִשְׂחָק 22 מִשְׂחָקָתָא לְעֵינֵי בְּכָל-עַתָּה 23 מִשְׂחָקָתָא כַּחֲבֵל אֲרָצוֹ 24 מִשְׂחָקִים לִפְנֵי יְיָ בְּכָל עֵצֵי בְרוּשִׁים 25 לֹא-יִשְׁבְּתֵי בְּכֹרֶם מִשְׂחָקִים וְאֲעֵלוּ 26 וַיֵּצֵא מֵהֶם חֹדֶה וְקוּל מִשְׂחָקִים 27 וַיֵּצֵא בְּמַחֹל מִשְׂחָקִים 28 וְלִדְמוּת וּלְדוּת מִשְׂחָקִים בְּרוּחַבְתֵּיהֶם 29 מִשְׂחָקִים לִפְנֵי הָאֱלֹהִים בְּכָל-עֵז 30 וְהַעֲבִירָה הַנְּשִׂימוֹת מִשְׂחָקוֹת וְחַמְסֵינָן 31 הַחֲשָׁחָק בּוֹ כַּצֹּפּוֹר 32 קְרָאִי לְשִׁמְשׁוֹן וּשְׂחָקֵי לֵנֹו 33 וְכָל-חַיִּית הַשָּׂדֵה וּשְׂחָקֵי-שָׁמַיִם 34 יְקוּמוּ נְאֻם הַעֲבָרִים וּשְׂחָקוֹ לְעֵינֵי בְּנֵי 35 מִשְׂחָקִים עֲלֵיהֶם וְעוֹלָעִים בָּם	שִׂחָק : שִׂחָק, שִׂחָק, שִׂחָקִים, שִׂחָק, שִׂחָקֵינוּ, שִׂחָקֵינוּ שִׂחָק : אִשָּׁה : 2, 4 בָּא : 17, 6, 4, 3 ג' : שִׂחָקוֹ הַחֲשָׁחָק, הַחֲשָׁחָק : 34-18 ד' : אִשָּׁה הַשִּׂחָקֵינוּ לְעֵינֵינוּ : 35 ה' : אִשָּׁה : הַחֲשָׁחָק (הַחֲשָׁחָק) : לְעֵינֵינוּ : שִׂחָק - מַחֹל מִשְׂחָקִים : 27 - שִׂחָקֵינוּ : 18-14, 12-7 - שִׂחָקֵינוּ : 5 - שִׂחָקֵינוּ : 31, 24, 23, 18 : שִׂחָקֵינוּ : 32 : שִׂחָקֵינוּ : 18, 22, 22 : שִׂחָקֵינוּ : 34, 28, 22	1 שִׂחָק 2 וְיָרָד וּשְׂחָק וְאֵין נֶחֱם 3 שִׂחָק 4 רֵאיוֹה עָרִים שִׂחָקוֹ עַל-מִשְׂבַּתָּהָ 5 אֲשַׁק 6 אֲשַׁק אֶלֶּהֶם לֹא אֲמַיֵּט 7 אֲשַׁק 8 אֲשַׁק 9 אֲשַׁק 10 שִׂחָק לְחַמּוֹן קָרְיָה 11 שִׂחָק לְשַׁחַר וְלֹא יִחַת 12 הָאֵל לְכָל-מַבְצָר יִשְׂחָק 13 יִשָּׁב בְּשָׂמַיִם יִשְׂחָק 14 וְיִשְׂחָק לְרַעַשׂ כִּדְרוֹן 15 מִשְׂחָק לְטוֹס הָרִכְבּוֹ 16 וְיִשְׂחָק לְיוֹם אֲחִירוֹן 17 יִשְׂחָקוּ
---	--	---	---

(表1) A NEW CONCORDANCE OF THE BIBLE より転載

<p>שחקן ὄφρων lachen, scherzen/laughter, sport / rieur, iocus 7r40,6 48,20 46,25 46,39 Ps42,6 Hi6,24 44,4 72,4 Ps40,25 101,15 101,24 73,7 10,49 73,4 73,4 101,24 73,4</p>	<p>שחקן ὄφρων lachen, scherzen/laughter, sport / rieur, iocus 7r40,6 48,20 46,25 46,39 Ps42,6 Hi6,24 44,4 72,4 Ps40,25 101,15 101,24 73,7 10,49 73,4 101,24 73,4</p>	<p>Pi. scherzen, spielen, tanzen/ to jest, to play, to dance/ iocari, ludere, saltare Ar16,25 49,16,7 256,5 62,4 45,15 70,40 71,4 58,5 Ps44,26 Hi40,20 40,29 Pr6,34 8,34 26,40 14,13,6 15,29 Hi. spotten/to scorn/deridere 2C30,40</p>	<p>שחקן Der. חשך, חשק Gal. lachen /to laugh/ridere Ar16,25 262,44 Ha7,14 Ps2,4 37,15 52,6 59,9 Hi5,22 29,24 39,1 39,7 39,18 39,22 41,21 Pr1,26 29,9 31,5 40,3,4 71,2</p>
---	--	--	--

(表2) KONKORDANZ ZUM HEBRAISCHEN ALTEN TESTAMENT より転載

No.	個所	新共同訳	新改訳	備考
1	コヘレト3:4	笑う	ほほえむ	+
2	箴言29:9	嘲笑い	あざ笑い	-
3	ヨブ30:1	嘲笑う	あざ笑う	-
4	哀歌1:7	笑っている	あざ笑う	-
5	ヨブ29:24	笑顔に向けた	ほほえみかけても	+
6	箴言1:26	笑い	笑い	-
7	詩編59:9	笑い	(v.8) 笑い	-
8	ヨブ5:22	笑ってられる	あざ笑い	-
9	詩編37:13	主は彼を笑われる	笑われる	-
10	ヨブ39:7	笑い	あざ笑い	-
11	ヨブ39:22	恐れを笑い	あざ笑って	-
12	ハバクク1:10	嘲笑う	あざ笑う	-
13	詩編2:4	笑い	笑う	-
14	ヨブ41:21	笑う	(v.29) あざ笑う	-
15	ヨブ39:18	笑うほどだ	あざ笑う	-
16	箴言31:25	ほほえみかける	ほほえみながら	+
17	詩編52:8	笑って	(v.6) 笑う	-
18	詩編104:26	戯れる	戯れます	+
19	サム下6:21	踊ったのだ	喜び踊るのだ	+
20	箴言26:19	ふざけた	戯れた	-
21	歴代上15:29	喜び踊る	喜び踊っている	+
22	箴言8:30	楽を奏し	楽しみ	+
23	箴言8:31	楽を奏し	楽しみ	+
24	サム下6:5	奏でた	喜び踊った	+
25	エレミヤ15:17	笑い戯れる	戯れる	-
26	エレミヤ30:19	楽を奏する	喜び笑う	+
27	エレミヤ31:4	楽を奏する	喜び笑う	+
28	ゼカリヤ8:5	笑いさざめく	遊ぶ	+
29	歴代上13:8	奏でた	喜び踊った	+
30	サム上18:7	楽を奏し	笑いながら	+
31	ヨブ40:29	もてあそび	(41:5) 戯れ	+
32	士師16:25	見せ物にして楽しもう	見せものにしてしよう	-
33	ヨブ40:20	戯れる	戯れる	+
34	サム下2:14	勝負させてはどうか	闘技させよう	+
35	歴代下30:10	冷笑い	物笑いにし	-

(表3)

表3から分かることは、**סַחַק**, sahaqが13の書物の中で35回にわたって使われていることである。そして、実に様々な訳され方があるのが分かる。おそらく英語訳に至ってはきりが無いだろう。また、備考の+-の表記については、喜び踊るとか楽を奏するなど、肯定的な意味に使われているものを+表記にしている。反対に、嘲笑うとか冷笑など他者を否定的に表現しているものには-とした。この+-の表記を見る限りにおいては、sahaqという単語は若干否定的な意味で使われていることの方が多い。

さて、子どもの純粋な遊びそのものについての言及は、ゼカリヤ書8:5における実にも1回のみという結果であった。この1回の使用例では、子どもの遊びについて何の結論も導けないという考え方もできるけれども、その言葉の意味の深さや用いられた背景を探ることは、決して無駄な作業ではないだろう。

また、「遊ぶ」と訳せるヘブライ語は、**סַחַק**, sahaqの他にもあるので、それについては別の機会に委ねるとして、次章では、sahaqの多様な意味についてさらに詳しく見ていこう。

3. 聖書に見られる **סַחַק**, sahaq の意味の多様性と背景

סַחַק, sahaqの意味は、2章で明らかなように決して単一ではなく、様々な意味を持って記述されていた。それぞれのsahaqの意味と使われた背景について、いくつか主なものを拾い出してさらに考えてみたい。なお、日本語訳聖書の引用は、新共同訳と新改訳の両方を載せた。傍点は筆者によるもので、ヘブライ語の**סַחַק**に対する訳の部分である。

(1) 笑うという意味について

《ヨブ29:24》

(新共同訳) 彼らが確信を失っているとき わたしは彼らに笑顔を向けた。彼らはわたしの顔の光を曇らせることはしなかった。

(新改訳) 私が彼らにほほえみかけても、彼らはそれを信じることができなかった。私の顔の光はかげらなかった。

ヨブ記は、聖書のちょうど真中に聳え立つ峻嶺、人類永遠の古典、人類最高の文学的傑作とも言われる一書である。ヨブは、族長時代に生きた人間であると思われるが、この29章はその信仰者ヨブの独白部分の中でも過去の祝福、おのれの活躍ぶりを回想している部分である。

彼は以前東方第一の資産家であり、牧畜も農耕もたいへん祝福されていた。若者も、老人も、首長たちもヨブに対して畏敬の念をもっていた。(v.7-10) また、ヨブの関心は貧しい者、みなしご、死にかかっている者、やもめ、目の見えない者、足のなえた者、見知らぬ者など社会的弱者にも注がれていたことが分かる。(v.11-17) 彼の意見は敬意をもって取り扱われ、下される判断や決裁は的確であった。(v.21-25) 彼の演説は、まるでしおれた魂にすがすがしい慈雨のようであり(v.23)、上記の24節にあるとおり、ヨブの笑顔(ほほえみ)が「それだけで優柔不断な者の強壮剤となった」⁶⁾ ことを現している。ヨブは実に「堂々、王者の風格をもちながら、嘆く者の慰め手であった。」⁷⁾ つまり、彼の笑顔sahaqや社会活動は、困窮者の利益を守り、あかの他人をさえ助けて立ち上がらせたものだったのである。文字通りヨブは正義の味方であった。

しかも、彼はこれらの栄光を自分自身に帰することをせず、すべて神の「恵み」のゆえであると断言し感謝している。⁸⁾ ヨブには、明確な神への信仰があり、神により頼んでいる人生が

ある。彼の活躍はそのまま神のなす業であるというのが、彼の告白である。そのような信仰の確信に満ちた過去のしあわせな日々を思い返しているヨブだったが、次の30章では人生一変して現実に引き戻されてしまう。

《ヨブ30:1》

(新共同訳) だが今は、わたしより若い者らが わたしを嘲笑う。彼らの父親を羊の番犬と並べることすら わたしは忌まわしいと思っていたのだ。

(新改訳) しかし今は、私よりも若い者たちが、私をあざ笑う。彼らの父は、私が軽く見て、私の群れの番犬とともにいさせたものだ。

1節で、ヨブはなんと自分が嘲笑われている。29章における sahaq とは正反対の意味で使われているのである。裕福だったヨブは、昨日までの人生から一変して無一物、無一文になってしまった。その成り行きはヨブ記の1、2章に詳しい。そして、以前自分を尊敬し仕えていた人々は、手のひらを返して今日は自分を侮辱しているのである。しかも、ヨブを主人として恐れ番犬といっしょに仕えていた人たちの息子たちまでが、彼のことを嘲笑っているのである。なんと屈辱であろうか。もとはといえば、世間から爪はじきにあい、岩穴などに住んでいた彼らを、ヨブ自身が助け出して面倒を見てやったのに、その頃の彼らは何の役にも立たない者たちだったのに、「それなのに、今や、私は彼らのあざけりの歌となり、その笑いぐさとなっている。彼らは私を忌みきらって、私から遠ざかり、私の顔に情け容赦もなくつばきを吐きかける。」(v.9, 10) 人の仕打ちと自己憐憫にさいなまれてしまうヨブがここには描き出されている。

しかし、彼はここで終わらなかった。自分の神に叫び (v.19-23)、なおも神に頼って助けを呼んだのである。(v.24) 29章が輝かしかっただけに、30章の暗さはいちだんとやるせなく恐ろしいのだが、神の声も聞こえず笑顔が見えなくても、それでも神を呼ぶ祈りは、『ヨブ記』の基調であろう。

ところで、このヨブの姿は、まさに十字架上のキリストを指しているといえる。イエスの「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」⁹⁾ という死に際の声は、一人息子の自分を捨てて、木にかけて呪う神をなおも呼ぶ信仰からくるものであろう。どんなに人々に嘲られても、自分のために命を捨てたキリストを救い主と告白するキリスト信仰 (Christianity) の基調がここにある。

以上、ヨブ記における2つの sahaq を見た。両者は正反対の意味に使われているが、いずれも大人たちの貧富や損得を巡る社会において、揺れ動く人間の感情の有りようを現しているように思われる。人々の評判や評価は、他者の中に絶対的なものを認めるというよりも、その人の財産や身なり、自分への利益の有無に大いに左右されるのではないだろうか。ヨブは神に対する信仰を失うことはなかったが、周囲の人々は彼の身なりや姿を見て動揺し、手のひらを返して彼をさげすんだ。大人たちの笑いの軽薄さが表現されていると思う。その中で、信仰とは人間の感情に左右されないものであることを、ここに学ぶことができるのではないだろうか。

(2) 演技する、闘技するという意味について

《士師記16:25》

(新共同訳) 彼らは上機嫌になり、「サムソンを呼べ。見せ物にして楽しもう」と言い出した。こうしてサムソンは牢屋から呼び出され、笑いものにされた。柱の間に立たされたとき、

(新改訳) 彼らは、心が陽気になったとき、「サムソンを呼んで来い。私たちのために見

「せものにしてよ。」と言って、サムソンを牢から呼び出した。彼は彼らの前で戯れた。彼らがサムソンを柱の間に立たせたとき、

士師記 (Judices) は、モーセ、ヨシヤアという偉大な指導者を失った後のイスラエルの民のおよそ200年間の歴史である。神は、この時代に12人の「さばきつかさ」(士師)を遣わして、政治的・軍事的指導者としてイスラエルを治めさせた。しかし、民は神に対して不従順で、その生活は無秩序であった。

上記に出てくるサムソンは、12人目の士師なのに女の誘惑に負けて、神の約束を破ってしまった。そして、ペリシテ人に捕らえられ目をえぐり出され牢に入れられてしまう。彼がその死を迎える日、ペリシテ人たちは酒に酔った席でサムソンを見せ物にして楽しんだ。同じ16章の27節には、「サムソンが演技するのを見ていた」とあり、sahaqの変化形 קִיחֶשֶׁק が使われている。ここでのsahaqを巡る背景と情景がこれである。この日サムソンは、もう一度力を与えられて宮を支えている中柱をかかえて倒し、宮にいたすべての人々とともに死んでしまう。神の命令に背いたゆえに見せ物にされたが、最後もう一度神の恵みを受けてサムソンは敵を倒し、死を逃げるのである。

サムソンも、ある意味ではキリストを示していると言えるけれども、この個所でsahaqの意味するものは、たいへん不愉快なものであろう。非常に筋肉質な外国の男の裸をさらして、人々は酒に酔いながら楽しんでいるからである。次の個所も、大人たちの思慮分別のない遊び(ゲーム)を巡る記事である。

《2サムエル記2:14》

(新共同訳) アブネルはヨアブに申し入れた。「若者を立てて、我々の前で勝負させてはどうか。」「よかろう」とヨアブは言った。

(新改訳) アブネルはヨアブに言った。「さあ、若い者たちを出して、われわれの前で闘技させよう。」ヨアブは言った。「出そう。」

これはサウル王の死後、彼の側近の將軍アブネルと対するダビデの將軍ヨアブが、それぞれの家来を出し合って闘技し勝負させるという一種の殺し合いの遊び(ゲーム)である。15節以下を読むと、最初12人ずつが出て「彼らは互いに相手の頭をつかみ、相手のわき腹に剣を刺し、一つになって倒れた。…その日、戦いは激しさをきわめ、アブネルとイスラエルの兵士たちは、ダビデの家来たちに打ち負かされた」とある。結局、これをきっかけにアブネルの部下は360人が打ち殺されたと聖書は伝えている。

なんという戦いであろうか。sahaqの遊びが発展して、同国人同士で大量殺人が行われているのである。この背景には、サウルの不信仰により神の祝福がダビデへ移行する経過があり、また、それによって時代はサウル家の没落とダビデ王国の確立、繁栄に向かっているということがある。しかし、それにしても人間同士の愚かな戦いが、sahaqを巡って描かれているのは、非常に考えさせられることだと思われる。

(3) 楽を奏する、踊るという意味について

《1サムエル18:7》

(新共同訳) 女たちは楽を奏し、歌い交わした。「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った。」

(新改訳) 女たちは、笑いながら、くり返してこう歌った。「サウルは千人を打ち、ダビデは一万人を打った。」

これはダビデがペリシテ人の代表戦士ゴリヤテを倒し、イスラエル軍が勝利を収めたのちの

記事である。女たちは様々な楽器を奏で、上の歌を何度も繰り返しながら戦勝の兵士たちを迎えたようである。「楽を奏し」と「笑いながら」とは、明らかに意味を異にしている。しかし、両者の意味は深く関係しているといってもいいだろう。この言葉の背景には、戦勝の喜びがあり、それを表現するのに歌があり、歌を導く楽器の演奏があり、そして笑いがあつたに違いないのである。この歌を聞いて、サウル王は逆に非常に怒り、「彼にないのは王位だけだ」(18:8)と嫉みの言葉を発するわけだが、歓迎した女たちの実感は歌の通りだったであろう。

《2サムエル6:5》

(新共同訳) ダビデとイスラエルの家は皆、主の御前で糸杉の楽器、豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバルを奏でた。

(新改訳) ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い。立琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った。

これも、同じように奏でるということは、喜び踊ることを伴うという意味であろう。民族によって違いはあるものの、人は楽しく興奮するような演奏を聴くと、自然と体を動かし踊ります。この言葉の背景には、異国の地に70年間奪われたままだった神の箱 (the ark)¹⁰⁾ を、ダビデ王とその民がバアラ、別名キルヤテ・エアリムのアビナダブの家から運び出すという出来事がある。彼らは全て様々な楽器を手に持って鳴らし、歌い踊ったのである。原語では「奏でた」と訳して十分だと思うのだが、新改訳ではそれに付随する形で「歌い…鳴らして…力の限り踊った」としている。読み込みすぎの感もあるが、その時の状況をよく描写しているのではないだろうか。この並行記事は歴代誌上13:8にもある。

その後、神の箱は一時オベデ・エドムの家を経てダビデの町に運び入れられる。その時の模様については、「主の箱をかつぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは肥えた牛をいけにえとしてささげた。」(6:13)とある。ダビデは、この大事業を成し遂げる時、まず礼拝をささげた。そして、「主の前で、力の限り踊った。」sahaqの生き生きとした演奏や心の底から沸き起こる喜びの歌や踊りの原点に、感謝の祈りと礼拝がある。これは、人間の生きる営みを考えるとき、注目に値することだと思う。

ダビデはこのとき激しく踊ったため、肉体は露出し狂喜乱舞した。矢内原はこの場面に言及して、これは「彼の信仰の純情にして真実なる面目を躍如たらしめる。王の威厳は人民に対して威張ることにあるのでなく、信者の品位は世に対して堅苦しい顔を装ふことにあるのではない。新鮮なる信仰は形式を嫌ふ。形式は生命を窒息させるからである」¹¹⁾と述べている。本来のsahaqは、純粋な信仰を底辺に持ち、形式に拘らない表現を産みだすものなのであろう。そして、これは遊びの本質についても暗示していると思われる。

ところが、この話には続きがある。

《1歴代誌15:29》

(新共同訳) 主の契約の箱がダビデの町に着いたとき、サウルの娘ミカルは窓からこれを見下ろしていたが、喜び踊るダビデを見て、心のうちにさげすんだ。

(新改訳) こうして、主の契約の箱はダビデの町にはいった。サウルの娘ミカルは、窓から見おろし、ダビデ王がとびはねて喜び踊っているのを見て、心の中で彼をさげすんだ。

《2サムエル6:21》

(新共同訳) ダビデはミカルに言った。「そうだ。お前の父やその家のだれでもなく、この

わたしを選んで、主の民イスラエルの指導者として立ててくださった主の御前で、その主の御前でわたしは踊ったのだ。

(新改訳) ダビデはミカルに言った。「あなたの父よりも、その全家よりも、むしろ私を選んで主の民イスラエルの君主に任じられた主の前なのだ。私はその主の前で喜び踊るのだ。

ダビデの妻の一人であるミカルは、彼が大勢の民の前で裸で狂ったように踊る sahaq を見て、彼を軽蔑したのである。しかし、ダビデはそうされてもなお、自分の言行を説明する。彼の姿勢は、神に向かって歌い踊ることと信仰が不可分であることを再度示しているのである。¹²⁾

(4) 戯れる、遊ぶという意味について

これまで sahaq を巡る背景には、おとなたちばかりが出てきた。しかも、否定的な意味で使われることが多く、歓喜に満ちて踊るダビデを描写するような使われ方は少なかった。だからとって、純粹無垢な表現としての sahaq が全く無いかということそうではない。下の文章を取り上げて考えてみたい。

《ヨブ記 40:20》

(新共同訳) 山々は彼に食べ物を与える。野のすべての獣は彼に戯れる。

(新改訳) 山々は、これのために産物をもたらし、野の獣もみな、そこで戯れる。

《詩編 104:26》

(新共同訳) 舟がそこを行き交い お造りになったレビヤタンもそこに戯れる。

(新改訳) そこを船が通い、あなたが造られたレビヤタンも、そこで戯れます。

ヨブ記のこの記述は、新共同訳では「ベヘモット」とあるが、新改訳聖書でははっきりと動物の「河馬」のことだと言っている。頑健な体なのに草食でユニークな動きをする河馬と他の獣が戯れあって共存しているという描写は、なんとも滑稽でこころ和むものであろう。また、レビヤタンについては、ヨブ記 40 章 (新改訳では 41 章)、イザヤ書 27 章にも記述がある。神に逆らう神話的な怪物、海の大型の生物という注解もあるが、おそらく「わに」ではないかと思われる。生け捕りにすることも殺すことも容易ではないどう猛なわにが、この詩編では「戯れる」とある。

皮肉にもこれらは人間ではなく巨大な動物を題材にした sahaq の描写である。ただこの二つの個所に共通することが、いずれも神の支配と栄光に包まれた世界を描いていることに注目したい。つまり、河馬やレビヤタンの sahaq、つまりそれら巨獣の戯れや遊びは、平和な世界を象徴しているのである。

最後に、子どもたちの遊びを描写した文章を巡って考えたい。

《ゼカリヤ書 8:5》

(新共同訳) 都の広場はわらべとおとめに溢れ 彼らは広場で笑いきざめく。

(新改訳) 町の広場は、広場で遊ぶ男の子や女の子でいっぱいになろう。

ゼカリヤ書は、バビロン捕囚 (BC586 年) 後にユダヤ人がようやく帰還し、エルサレム神殿の再建工事を開始する頃に書かれた預言書である。紀元前 520 年頃のことであろう。特に 7 章と 8 章は、エルサレム回復の預言となっている。8 章 4 節には次のように書かれている。「万軍の主はこう仰せられる。『再び、エルサレムの広場には、老いた男、老いた女がすわり、年寄りになって、みな手に杖を持とう。』(新改訳) 老人たちはいまや剣や盾を手にはせず、杖を持つという。そして 5 節、子どもたちは、男の子も女の子も大勢町の広場に集まって遊ぶだろう

という。

前述してきたおとなたちのあざ笑い、闘技、演技の sahaq とは、明らかに対照的な引用である。しかも、捕囚前のイスラエルは、たいへん墮落していた。その廃退したおとなたちの姿に対比させて、子どもたちの「遊び」が、自由や平和を象徴するものとして、引用の数こそ少ないものの確かに描かれているのである。ここから、私は子どもの遊びの中に、自由や平和の本質を見ることができるとは思わないかと考える。

捕囚からの解放の予告を描写する sahaq は、預言者エレミヤの書にも出てくる。30:19 及び 31:4 がそれである。¹³⁾ ここでの sahaq は「楽を奏する」「喜び笑う」と訳され、自由を回復して喜び祝う姿が描かれている。エレミヤ書は、全体的に実に暗く悲劇的な文章の多い書物である。エレミヤがバビロンの勝利とユダの捕囚を預言したからである。ゆえに彼は迫害され最も悲哀の預言者、涙の預言者と呼ばれた。しかし、彼の預言は当然すべて成就された。それだけに、捕囚前の悲惨な描写と、30、31 章の sahaq に見られる平和の描写は、見事なほどの対比を生み出している。

これを聖書はどう説明するだろうか。つまり、純粋な子どもの遊びや動物たちの戯れに象徴される平和と、捕囚前のおとなたちの劣悪極まりない戯れや墮落しきった姿を生み出す違いはどこから来るのか、次章でまとめてみたい。

4. פִּנְיָ, sahaq の本質と保育

(1) 遊びの本質

ヨブ記 30 章では、かつて雇い人だった人たちやその息子たちまでが、全く変わり果てたヨブを見て蔑み、嘲笑ったという sahaq の引用を見た。また、士師記 16 章では、かつての力を失い、目をえぐり出され、裸の見せ物にされたサムソンの演技 sahaq を見た。そして、一国の將軍の提案で殺し合いのゲームが繰り広げられた sahaq もサムエル記下に見た。聖書における遊び פִּנְיָ, sahaq の意味は、まるでおとなたちの愚かな戯れとしか読み取れない。

しかし、同じ裸をさらしたのも、ダビデの踊り、sahaq は違っていた。彼の演じた sahaq は、神への賛美と感謝を表現するものであった。(サムエル記下 6) また、捕囚から解放されて平和を回復していくイスラエルの姿を描写するために、聖書が取り上げたのは、子どもたちの遊び、sahaq であった。(ゼカリヤ 8) これは非常に注目に値することだと思われる。これらの肯定的な sahaq の引用の背景にあるものは、いったい何だろうか。それは、神への信仰が、遊ぶという行為の底辺にあるということではないだろうか。ダビデの踊りも子どもたちの遊びも、つまりいずれの sahaq も、神への礼拝と切り離せないということである。獣たちの戯れ、sahaq (ヨブ記 40、詩編 104) も神との平和を描写しているという点で、それはまさしく神への礼拝の形式をとっている。とすれば、動物たちの平和な戯れや、子どもたちの無邪気な遊びそのものが、神への礼拝の行為なのだと考えるのは飛躍であろうか。今回の sahaq を巡る考察を通して、遊びの本質が心の解放とか真の自由とか、あるいは喜びや平和であるならば、それらは、神への礼拝を動機づけるものと一致するという結論に私は達するのである。反対に、神を恐れず礼拝から遠ざかる結末が、逆の意味の sahaq、すなわち嘲笑であり裸を見て楽しむことであり、戦争なのではないだろうか。

(2) 保育への示唆

上記のことから、保育に携わる者たちが、次に考えなければならないことは何だろうか。それは、言うまでもなく自由と平和の象徴である子どもの遊びを、聖書の示す通りに保障し充実させることである。また、その子どもたちの父母たちにも心から歌いたくなるような、また、体を震わせて踊りたくなるようなsahaqを、提供し体験させることではないだろうか。それは言うまでもなく、神が本来創造された人間とsahaqの望ましい在り方を実現させ、子どもたちが思う存分に力を発揮して育つことを助けることなのである。

子どもたちを巡る家族、社会、国の状況は目まぐるしく変化している。いまや小手先の修正だけでは解決しないことばかりである。しかし、だからといって子どもたちの遊びが能動的で活気ある姿を取り戻せば、それでこと足りののだということにもならないだろう。私は、まずは本来の遊びの意味がしっかり把握されることが大事であろうと考える。この理解を少しでも共通の基盤にしたうえで、今日の社会や教育環境のもとでの問題点にアプローチしていくことが必要ではないだろうか。換言すれば、今日ほど、子どもの遊びの意味が、条件整備や、機能的問題に偏らず、本質にまで探求されなければならない時代はないということなのである。

おわりに

今回、旧約聖書における סַחַק , sahaq を取り上げて、その意味について考えてきた。その意味について考えれば考えるほど、その深さに引き込まれて聖書が教えようとしていることに驚嘆することが多かった。ただ、「遊ぶ」という意味を持つヘブライ語は、他にもいくつかある。それらの意味や引用を見るまでには今回至らなかった。また、新約聖書における「遊ぶ」(παίζω , paizo) についても書けなかった。さらに、聖書の中心人物であるイエス・キリストの子ども理解や遊びについての言及にも今後触れない限り、聖書全体における遊びの考察は終わらないだろう。課題はまだ多いと思われる。ただ、気をつけたいこととして、この研究が聖書を今後も扱っていくとしても、その趣旨を決して忘れてはならないということである。丁寧に聖書を読みながら、また、教えられながら今後も研究を続けていきたい。

註

- 1) 聖書の趣旨について述べる前に、聖書がまず誰によって書かれたかを明らかにしなければならない。これについては、聖書自身が次のように語っている。「聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」(ペテロの手紙II 1:20b, 21) つまり、聖書の著者は神ご自身であるということである。その神の真意が聖書の趣旨として書かれるわけであるが、これについては、ヨハネによる福音書3:16がそれを最もよく言い表している。すなわち「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」さらに、聖書の本性については次のように書かれている。「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」(テモテへの手紙II 3:15b, 16)
- 2) 『聖書語句大辞典』(教文館)では、sahaq(sachaq)の他に סַחַק (arab)、 טַסַחַק (tsachaq)、piel、 εὐφραίνω (euphraino)、 περιερχομαι (perierchomai) も遊ぶという動詞に当てている。
- 3) BDBとは、3人の著者の頭文字をとったものである。その3人とは、Francis Brown, S.R.Driver,

C.A.Briggsである。

- 4) ヘブライ語聖書とはBIBLIA HEBRAICAのことである。聖書の原典は、現在一つも存在していない。産業革命によって印刷技術が誕生・発展するまで、聖書の言葉は口伝と写本によって生き残ってきた。聖書の生い立ちや口伝及び写本の信頼性、そして正典性については、榊原康夫『旧約聖書の生い立ちと成立』〈増補改訂版〉いのちのことば社、1994年を参照。
- 5) 表1は、Abraham Even-Shoshan, A NEW CONCORDANCE OF THE BIBLE, Kiryat Sefer, Jerusalem、表2はGerhard Lisowsky, KONKORDANZ ZUM HEBRAISCHEN ALTEN TESTAMANT, Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, 1958から קִרְיַת סֵפֶר の部分を転載した。後者には動詞形の他に名詞形も抜き出して記述してあるが、今回は詳しく取り上げていない。また、表1を基にして作ったものが表3である。なお、変化形の一つ一つを詳細に分析することはここでは不可能であるし、あまり意味があるとは思われないので省略した。
- 6) 舟喜順一監修『聖書注解』キリスト者学生会、1959年、p397
- 7) 小畑進『ヨブ記講録』いのちのことば社、2004年、p446
- 8) 「ああ、できれば、私は、昔の月日のようであつたらよいのに。神が私を守ってくださった日々のものであつたらよいのに。あのとき、神のともしびが私の頭を照らし、その光によって私はやみを歩いた。私はまだ壮年であつたころ、神は天幕の私に語りかけてくださった。全能者がまだ私とともにおられたとき、私の子どもたちは、私の回りにいた。」(ヨブ記29:2-5)
- 9) マタイ27:46「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになつたのですか。」マルコ15:34も参照。
- 10) 別名主の箱、契約の箱と呼ばれる。イスラエル人にとっては神の臨在を象徴するもので、中には十戒の石板、アロンの杖、マナを入れた金の壺が納められていた。
- 11) 矢内原忠雄『聖書講義V』岩波書店、1978年、p529
- 12) ダビデの行為を軽べつしたミカルについての聖書の言及は、「サウルの娘ミカルには死ぬまで子どもがなかった」(2サムエル6:23)で終わっている。
- 13) 「そこから感謝の歌と 樂を奏する者の音が聞こえる。わたしが彼らを増やす。数が減ることはない。わたしが彼らに栄光を与え、侮られることはない。」(エレミヤ書30:19)
「おとめイスラエルよ 再び、わたしはあなたを固く建てる。再び、あなたは太鼓をかかえ 樂を奏する人々と共に踊り出る。」(エレミヤ書31:4)

参考文献

- 小畑進『ヨブ記講録』いのちのことば社、2004年
『旧約新約聖書大事典』教文館、1989年
『ギリシア語新約聖書釈義事典3』教文館、1995年
『現代ヘブライ語辞典』キリスト聖書塾、1984年
榊原康夫『旧約聖書の生い立ちと成立』〈増補改訂版〉いのちのことば社、1994年
『新約聖書ギリシア語辞典』キリスト新聞社、1978年
『聖書』(新改訳、新共同訳、口語訳、文語訳、BIBLIA HEBRAICA、THE GREEK NEW TESTAMENT)
『聖書語句辞典』聖書図書刊行会、1955年
『聖書語句大辞典』教文館、1954年
津守真『自我のめばえ』岩波書店、1984年
舟喜順一監修『聖書注解』キリスト者学生会、1959年
ミルトス・ヘブライ文化研究所『ヘブライ語聖書対訳シリーズ サムエル記Ⅰ～Ⅲ、詩編Ⅰ～Ⅲ』ミルトス、1990年～
矢内原忠雄『聖書講義V』岩波書店、1978年
ANALYTICAL CONCORDANCE TO THE BIBLE, Robert Young, W.M.B.Eerdmans, 1975
A NEW CONCORDANCE OF THE BIBLE, Abraham Even-Shoshan, Kiryat Sefer, Jerusalem, 1989
HEBREW AND ENGLISH LEXICON OF THE OLD TESTAMENT, Francis Brown, S.R.Driver, and Charles A.Briggs, Oxford University Press, 1906, 1951
KONKORDANZ ZUM HEBRAISCHEN ALTEN TESTAMANT, Gerhard Lisowsky, Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, 1958
The NIV Complete Concordance, HODDER AND STOUGHTON, 1983